関西大学
なにわ・大阪文化遺産学研究センター　News Letter

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業

難波潟

2005.12
No.2

題字　浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

出開帳　河内国府遺跡里帰り展

2005年 10月 22日（土）
会　場：道明寺天満宮

2005年10月22日（土）、道明寺天満宮において、地域連携企画第1弾「河内国府遺跡里帰り展」が開催されました。

河内国府遺跡の発掘調査は、大正年間、当時の大阪毎日新聞社主本山彦一氏がスポンサーとなって行われ、その出土品が、戦後、関西大学博物館に寄贈されました。また、当時の調査は道明寺天満宮を事務所として行われ、遺物の一部が同社の宝物として収められています。そこで、道明寺天満宮のご協力と藤井寺市教育委員会の後援により、これらの発掘品が、８０年余ぶりに、発掘現場に近い道明寺天満宮に里帰りしました。

また、道明寺天満宮には渡唐天神像が所蔵されていることが知られており、里帰り展はこれら発掘・所蔵品の展示を目的として行われました。

さらに、展示と合わせて国府遺跡、渡唐天神像に関連した講演が関西大学文学部教授米田文孝氏、助教授長谷洋一氏によって行われました。

当日は雨にもかかわらずたくさんの方々が会場に足を運んでくださり、展示・講演会ともに盛況のうちに終了しました。総来場者は251名でした。

南坊城　充興氏

挨　拶

道明寺天満宮宮司　南坊城　充興氏

皆さんこんにちは。国府遺跡の遺物というものは、本山コレクションというものがあって、関西大学に入ったという事は新聞で、報道で知っておりましたけども、実物がどんなものであるかというのは本当にわからなかったのです。このたび、関西大学のいろんな資料を拝見しておりますと、大正6年から発掘をされる前に、明治時代には、縄文式の石器とか、そういうものがあるということが報告されていたようです。そして最終的には、大正6、7年ごろに京都大学で、のちに学長となる考古学者、濱田青陵先生を中心として、そのスポンサーである大阪毎日新聞社主の本山彦一、この方は松陰とも号されていましたが、その方々が、この道明寺天満宮の社務所へ泊まりこんで毎日、国府へ発掘に行っておられました。このたび里帰り展ということで、この藤井寺の地で、公開されることになりましたことを、本当に喜んでいる次第であります。

また、高松藩儒者藤沢南岳が開いた泊園書院という塾に保管されていたたくさんの書籍が、戦時中に道明寺天満宮の宝物館に預けられていましたが、戦後、関西大学に寄贈され、それが、泊園文庫として現在、残っております。そういう意味でも、道明寺天満宮と関西大学とは、大変つながりが深いなぁということを感じざるを得ないわけです。また、今回は、渡唐天神につきましてもご専門の先生のお話があるようでございます。本日はお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。

米田　文孝氏

河内国府遺跡の意義と遺物

関西大学文学部教授　米田　文孝

国府遺跡は、明治25年にその存在が知られるようになり、大正6年、発掘調査が開始されました。戦後には鎌木義昌氏や大阪府教育委員会、あるいは藤井寺市教育委員会などにより断続的に発掘調査が実施され、中心部が国史跡に指定されています。大正時代の発掘調査の大部分について、当時の道明寺天満宮宮司であった南坊城良興氏が深く関与されて、支援されていました。

つぎに、考古学の学史でみた場合、国府遺跡は学術調査により近畿地方で初めて後期旧石器時代の石器が確認された遺跡としても重要です。昭和32年の調査で、更新世の土層中から発見されたサヌカイト製のナイフ形石器は国府型ナイフ形石器、一連の製作過程は瀬戸内技法と命名されました。この技法は全国的に広がっています。このように国府文化は、日本列島固有で独創的な石器文化として光彩を放っています。

多岐にわたる成果のうちで玦状耳飾を中心にみていきますと、国府遺跡では表面採取されたものも含めて総数15か16個体が出土したと伝えられており、縄文時代前期中頃から後半に位置づけられています。また、関西大学博物館が所蔵する第3次調査第4人骨の頭部の石膏型は、玦状耳飾の使用方法を具体的に示す貴重な資料です。開いたところが下になっており、耳たぶを切り開いた孔に引っ掛けるように着けていたようです。さらに、東アジア的な視野からみると、玦状耳飾に類似した遺物が、中国やインドシナ半島など広範に分布しています。玦状耳飾には中国起源説、日本自生説があり、どのような契機で日本に出現し、中国などとどのような関係、意義があるのか大変興味深い問題だと思います。

また、抜歯あるいは叉状研歯が観察できることも注目されます。抜歯は後期旧石器時代からの風習で、研歯は縄文時代後晩期に行われた風習です。

以上のことから、縄文時代が高度に発達した豊かな狩猟採集民社会であったということを前提とした場合、玦状耳飾には形態や材質の優劣があり、階層差が反映している可能性があります。すでに縄文時代前期の社会に定住や貯蔵が行われ、階級差などが生じたことが示唆されるのです。これをどのように評価するかというのは専門研究者の中でも見解が分かれますが、今後とも検討を重ねていかなければならない重要な課題です。学術的にも重要な国府遺跡の歴史資料を保管する機関に所属する者として、はるか2万年前から国府遺跡の地にその足跡を残した先人に思いをはせながら、今後も調査研究を進めたいと思います。

長谷　洋一氏

渡唐天神図について

関西大学文学部助教授　長谷　洋一

天神様の姿を描いた絵画というのは、様々あります。一番多いのは束帯像です。束帯を着て、手には笏と太刀を持ち、畳の上に座っています。そして、綱敷天神像は船の艫綱をくるくると巻いて、座布団がわりに座っています。座りながらひしひしと怒りがこみ上げ、怒りの表情が出てくるわけです。怒りで白髪になるという、激しい怒りを持つ天神像なども現れてきます。その他、関東地方に多少確認されている影向像があります。

渡唐天神というのは、実は菅原道真公の生涯とは何ら関係ない、説話から始まった画像で、南北朝時代あたりに成立したものです。道真公が、博多崇福寺の円爾のところに現れ、禅の悟りである印可を得たいと希望します。そこで円爾が宋の無準師範を紹介すると、一夜のうちに博多から宋に渡り、無準師範のところに参じて、印可をもらい、衣を授かってきたという説話に基づく絵です。

渡唐天神像は、仙冠を被り、道服を着て、梅の枝を持ち、右腰の所には肩から下げた袈裟袋が描かれています。その中には無準師範から戴いた衣が納められています。このような点が大きな特徴になります。全体に正面を向いており、この正面を向くというのは基本的に礼拝の対象になります。

そして、徐々に画家や観賞者の意向のもとに変化していきます。まず、渡唐天神が横を向いて梅の香りを嗅いでいる像のように、正面を向いていた像がだんだんと横を向いて、動き出すようになってきます。雪舟も渡唐天神を描いていますが、自然との交感ということで、天神様は梅の枝や松の枝に腰かけており、梅の花を持つという定形ではない像です。このような形でバリエーションが広がっていきますが、狩野派では、真直ぐ立っていた渡唐天神が体を捻るようになって、天神様が腰を捻りながら梅の香りを嗅ぐというような形になってきます。また、室町時代には、中国・明へ日本の商人が大勢行くことになり、中国でも日本の商人、あるいは僧侶向けに、渡唐天神像が描かれました。

江戸時代に入ると、以前の渡唐天神の作品に比べて面白みのあるユーモラスな渡唐天神に変わっていきます。近衛家尹が描いた文字絵の渡唐天神像は、像の輪郭が「天神」という文字で描かれており、頭部から左肩にかけて「天」、右手から腹部、左手にかけて「神」という草書体にみえなくもありません。

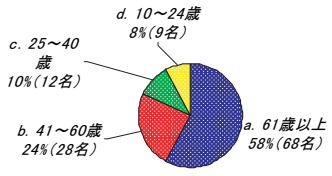
最初は非常に怒った表情をした天神様でありましたが、どんどんと変化して、最後はユーモラスな絵になってくるわけです。それは「怒りの神様」から、我々に親しみの持てる神様に変わってきたことを意味するわけです。童謡にも、「天神様の細道」という歌詞があります。最初は怒りの神様であった天神様が、いまでは親しみのある学問の神様に変わっていった。そういった変化の中で、渡唐天神像の果たしていった役割ということを、今一度考えていかなければならないのではという気がします。

講演会場

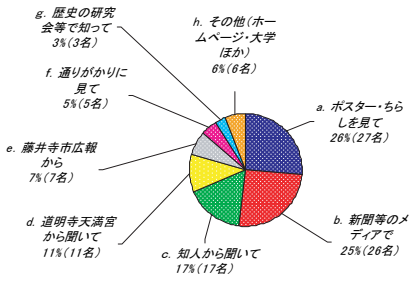
展示会場

参加者のアンケート結果から

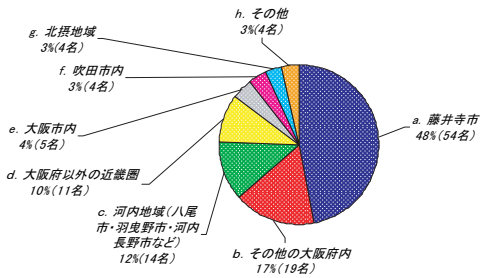
参加者の年齢（回答者数117名）



何でお知りになりましたか？（回答者数102名）



参加者の居住地域（回答者数115名）



○参加者の感想○

- 国府遺跡は身近な存在だが、内容は知らなかったので、展示や講演で理解でき、より身近になった。
- 講演や遺物の展示説明が懇切であった。
- 国府遺跡や天神様のスライドによる講演で、研究センターの研究内容がよく分かった。
- 年齢的なこともあり、地元での開催は嬉しい。
- 非常に広い空間的な話で難しい点もあった。
- 国府遺跡としてもう少し幅広いもののほうが全体の遺跡理解に役立つと思う。
- 関西大学だけでなく他の機関の協力も必要ではないか。

○今後取り上げてもらいたい内容など○

藤井寺市の絵馬・摂河泉の文化・式内社・古墳陵墓（継体陵など）・長吉永原遺跡・壺井源氏井真成・難波宮

アンケートにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

（文責：RA千葉　太朗・PD森本　幾子）

NOCHSレクチャーシリーズ

なにわ・大阪の神社

2005年　9月24日（土）
会　場：関西大学尚文館

2005年9月24日（土）、関西大学尚文館において、「なにわ・大阪の神社」と題して第1回レクチャーシリーズが開催されました。

はじめに、祭礼遺産研究プロジェクトが大阪ブランドコミッティと提携して行なった大阪の夏祭り調査の成果が、RAの内田吉哉から報告されました。つぎに祭礼遺産研究プロジェクトの研究メンバーである近江晴子氏（大阪天満宮文化研究所）と、明治安田生命・関西を考える会代表の真野修三氏によってそれぞれ講演がおこなわれました。司会進行は森隆男氏（関西大学文学部教授）にお願いしました。

なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、大阪の文化遺産の調査・研究とともに、次世代への文化遺産の継承と保全・復興を大きなテーマとしています。大学や博物館だけでなく、民間企業の中で大阪の文化遺産について活動されている方を講師に招くことによって、当センターとしても大変みのり多い行事となりました。参加者は、42名でした。

報　告

大坂三郷の氏神さんと夏祭り

大阪天満宮文化研究所研究員　近江　晴子

大坂三郷というのは江戸時代の大阪の町のことを指しています。北郷・南郷・天満郷（北組・南組・天満組）の三つの行政区画から形成されていたので、大坂三郷と称されました。現在、旧大坂三郷内に氏神さんが9神社あります。大阪天満宮・御霊神社・坐摩神社・難波神社・御津八幡宮・玉造稲荷神社・高津神社・生國魂神社・難波八阪神社です。これらのお宮さんのうち、生國魂神社と難波八阪神社は大坂三郷外に位置しますが、氏地が大坂三郷内にあるということで9神社としております。9神社とも江戸時代以来場所は変わらず、もとの場所に鎮座しておられます。これらの神社の他に大正13年に移転された平野町神明宮（日中神明）について『摂陽奇観』に内平野町、船越町ほか数町を氏地としてあげていますので、大坂三郷内の氏神さんは10神社あったことになります。

大阪の氏神さんの夏祭礼日ですが、江戸時代は6月に集中しており6月が祭り月でした。現在では７月が祭り月になっています。これは、明治5年12月から太陽暦が採用され、旧暦6月の夏祭りを一ヶ月ずらして7月に移したためです。その移行の過程が大阪天満宮所蔵「大阪天満宮文書」の「公庁諸願届書写」「当番所雑記」などから分かります。大阪天満宮では、明治6年から明治10年までの5年間は、毎年、天神祭の日即ち旧暦6月24・25日は新暦の何月何日にあたるのか調べてきめておりますので、年によって天神祭の日が変わっています。明治11年からはポーンとひと月ずらして、7月24・25日を夏祭礼日として現在にいたっております。大阪天満宮以外の氏神さんでは戦災で史料が失われておりますので、詳しい状況を確かめることができませんが、それぞれのお宮さんでもほぼ同じ頃に夏祭礼日をひと月ずらされたのではないでしょうか。

大阪の中心地、船場には、御霊神社・坐摩神社・難波神社の3神社（氏神）が祀られています。これらの氏神さんの夏祭りは、戦前までは江戸時代以来の祭りの風景がよく残っていたようです。氏神さんの夏祭りとなると、氏地の町全体がガラリと様相を変えてしまいます。仕事は全部お休みで氏地の町全体でお祭りをする。どこのお家も表には家紋のついた幔幕を張り、提灯を吊します。店の間を開け放って家宝の屏風を立てます。夏祭りの日は、日常のケの暮らしとは一変するハレの日なのです。この背景には、江戸時代に大坂三郷内の、約620町に及ぶ町々がそれぞれがっちり固まった町内共同体であり、その町内に家屋敷を所有する町人（狭義の大阪町人）たちが、町内共同体の一員として規律を守り、分相応に恥ずかしくない暮らしを営んでいるということがあります。町内共同体にとって、年中行事の内、氏神さんの夏祭りは氏地の全町内揚げて取り組まねばならない特別大切な行事でした。その風習が、明治に入って、大正、昭和と受け継がれて来たのです。

近江　晴子氏

関西を考える会の活動と「大阪の寺社」

明治安田生命
関西を考える会代表　真野　修三

関西を考える会の活動は、今年でちょうど30年を迎えました。当会は、旧明治生命が創業95周年を迎えたときに、大阪で勤務する有志が、何か地域に貢献できる活動を、とはじめたのが最初です。以来、毎年違うテーマで活動してきました。寺社についてお話しますと、都道府県別に見て寺院が一番多いのは愛知県です。二番が大阪府、三番が京都府。では、神社が少ないところはというと、四番目が大阪です。寺院が全国で二番目に多いのに、神社の数は少ない。統計的にこうした状況を見て、関西は他の地域と若干、違うのではないかと。そして、関西に特徴的な年中行事のなか、他の地域と違った寺社との関わりの中で人びとは生活しているといえます。これらが今年、テーマとして「関西と寺社」を取り上げるに至った基本的な考えです。

今回の冊子『関西と寺社』で、識者の方から大阪の神社についてどんなものが出されたのか、ご紹介します。まず、マンガ編集者でライターの中野晴行さんが堺の開口神社を、阿倍野研究家の難波りんごさんが安倍晴明神社をあげています。雑誌『大阪人』の編集長、北辻稔さんは石切神社を、料亭花外楼の女将、徳光清子さんは今宮戎の紹介をされています。大阪天満宮については、太田房江大阪府知事が紹介しています。

識者の目から関西の姿を探るということに、我々の活動の本意があることもお考えいただきたいと思います。目に見える文化財、建築物としての寺社ではなく、人や地域との関係からということです。それには社会が少子高齢化を迎える中で、寺社が人びととどう関わっていくのかがメインとなります。少子化が寺社に与える影響として、寺院は檀家数が極端に減っていき、地域的な収入がなくなってきます。神社はお祭りとの関係で、少子化が進めば氏子数が減っていきます。お祭りも多様化しつつ、少子化への対応もしなければならない。次は、高齢化の問題です。年齢を経ると寺社や宗教に対する関心が高まって来ますが、それに対する寺社側の対応はどうなっているのか。

もともと、寺社というのは宗教的な機能だけではなかったと思います。明治以前はさまざまな機能を果たしてきた場でした。寺院は寺子屋といわれたように教育の機能を果たしてきた歴史があります。神社も、江戸時代にはこんな川柳もありました。「伊勢参り大神宮にもちょっとより」。参詣というのは観光的な側面も大きかったと思われます。

明治以降、国が大きくなっていく中で、寺社が持っていた機能が失われてきました。私個人としては、神社やお寺さんに、もう一度、かつて持っていた地域的、社会的機能を考えていただきたいと思います。そういうことを、自然環境問題、地域とのコミュニケーションも含めて研究していったら面白いんじゃないかと考えています。

真野　修三氏

参加者の感想（アンケート結果から）

- 準備も含めて順調に進められ、第１回であるが大きな成果を期待ができる。
- 次回以降のフォーラムを楽しみにしている。
- 大変興味深い話だった。このようなフォーラムを大変意義深いものだと思っている。
- 大阪の数多くの祭りを知ることができてよかった。
- 今回のフォーラムでは、自分の生活の中にも関わる部分があり、大変親しみやすいものだった。
- 地域の人と人との繋がりで研究が進められることを実感した。
- 自分自身が夏祭りの調査に参加し、更に先生方のお話を聞き、その歴史と関連性を学ぶことができた。
- 地域の祭りなどの地味な研究を応援したい。
- 個性のある発表が興味深かった。
- 真野さんの資料と発表がわかりやすく面白かった。

アンケートにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

（文責：RA内田　吉哉・PD森本　幾子）

研究室だより

第1回　祭礼遺産研究例会

黒田　一充（関西大学文学部助教授）
「大阪の夏祭り調査報告」
2005年9月10日（土）

例会は、報告者より大阪の夏祭りの特徴が説明されたのち、夏祭り18件について調査時に撮影した映像とともに下記のように紹介されました。

＊　　＊　　＊

大阪の夏祭りといえば、「愛染さんから住吉さんまで」のことばで親しまれているとおり、愛染祭や住吉祭、また天神祭はニュースにも取りあげられる機会が多く、よく知られています。その一方で、6月30日の愛染祭に始まり、8月1日の住吉祭に至る約一ヵ月の間に開催される他の夏祭りついては、あまり知られていません。そこで、それら夏祭りについて、祭礼遺産研究プロジェクト班の調査として、大阪府下の主な祭りを取りあげて夏祭りカレンダーを作成し、大学院生が中心となって実際に祭りに赴き、調査をしました。

夏祭りは、疫病退散などを祈願する目的や、見世物的な意味合いがあり、都市祭礼としての要素を持っています。現在の夏祭りは時候にあわせて新暦で開催するため、近世期とは開催月が移行し、日付が変化しているものの、近世以来の伝統を引き継いでおり、また、都市祭礼の要素だけでなく、バラエティーに富んだものです。

大阪の夏祭りの特徴をあげると、1つは、天神祭、住吉大社の夏越祓神事における茅の輪くぐりに見られるように、疫病などの災厄を祓うという要素です。2つめは、農村部の祭りの要素が残っている点です。石切劔箭（つるぎや）神社では、7月2日に献牛祭が開催されますが、これは、半夏生（はんげしょう）にまつわる習慣であり、田植えが終わった農家で、牛をねぎらったところに由来するものでしょう。3つめは、修験道に関する行事です。旧暦6月7日は役行者の命日とされているため、現在7月7日には、箕面・瀧安寺や、金剛山・転法輪寺と葛木神社において、それぞれ採燈大護摩供、蓮華祭が行われています。4つめは、神仏習合の名残が見える点です。平野・杭全（くまた）神社の夏祭りでは、神輿がお旅所に赴いた後、神社とゆかりの深い全興寺・長宝寺に立ち寄っています。その他にも、交野の七夕祭や、生國魂神社、高津神社にみられる子供の額に朱印を捺す行為、陶器神社の瀬戸物の作り物、生根神社のだいがくなど、注目すべき祭りがあります。

＊　　＊　　＊

なお、報告後の討論では、祭礼時の作り物や修験道の行事と蓮華との関係について質問が出されたほか、江戸時代における大坂三郷の都市部の祭りと、河内国の農村部の祭りは分けて考察する必要がある、との指摘がありました。

（文責：RA内海　寧子）

第1回 生活文化遺産研究例会

酒井　亮介（(社)大阪中央卸売市場本場市場協会資料室・室長）
「なにわ・大阪の食文化 序説」
2005年10月1日（土）

今回の研究例会では、「なにわ・大阪の食文化序説」というタイトルで酒井先生にご報告いただきました。なにわ･大阪の食をとりまく生産、流通、消費など、さまざまな角度からの考察がなされていて、大変興味深いものでした。

食糧生産が自然環境に大きく左右されるというのは当然のことですが、多様な自然環境を持つ日本という国は、それだけ多種類の生物が生存できる環境にあるといえます。酒井先生いわく、それが「日本料理の独自性」を生み出したのだといいます。また、地理的条件は流通経路などにも影響を与え、それが地域の発達などに強くかかわっているようです。魚に関して言うなら「海流」です。黒潮と親潮という大きな海流が魚の生息や漁業に大きな影響を与えるのはよく知られていることですが、もっと小さな海流ですら、人間の生活には大きな影響を与えます。たとえば、明石海峡大橋の下の辺りにある海流は船を沈めてしまうほど強いもので、瀬戸内海の魚を大阪に運ぶ際はここを通れず、いったん明石へ水揚げしてから大阪に運んできたために、明石港が発展したといいます。

また、地理的条件は人の往来にも影響を与えます。人が動けば、そこには人と人との交流が生まれ、「文化」が生まれます。もちろん、その文化の中には「食文化」も含まれます。外来のものがなければ、今の日本の食卓はさみしいものになっているに違いありません。私たちが普段当たり前

のように食べている野菜ですら、日本原産のものはミツバ、ウド、セリ、フキの4種類しかないそうです。ほかの野菜は中国や朝鮮半島、フィリピンや台湾などを経由して入ってきた外来種なのです。言われてみれば、野菜の名前は日本的な響きでないものが多いような気もしますが、実に意外なことでした。

意外といえば、「熟成」の話も意外でした。「うまみ」のもとになる成分がグルタミン酸とイノシン酸であることは聞いたことがありましたが、イノシン酸が動物性のものだということまでは知りませんでしたし、熟成によって時間とともにそれが増えていくことも知りませんでした。魚はとれたてのものがおいしいのだと思い込んでいたのですが、そうではないようです。

地図をみればわかるように、大阪は日本の真ん中あたりにあります。近世の段階では物流、金融は大阪を中心として動いていました。人が動けば食が動き、食が動けば経済も動きます。みなさんも一度、今日の食卓に並んでいる食べ物について、考えてみてはいかがでしょうか。それはきっと、今まで見落としてきた大阪の歴史を拾い上げることにつながるに違いありません。

（文責：RA宮元　正博）

第1回　学芸遺産研究例会

島津　忠夫（大阪大学名誉教授）
「大阪天満宮御文庫のこと―連歌書を中心に―」
2005年10月1日（土）

まず、大阪天満宮編『大阪天満宮御文庫国書分類目録』（1977年）と大阪天満宮社務所編『大阪天満宮連歌書目録』（1971年）の関係性について、お話しされました。

『大阪天満宮御文庫国書分類目録』の「四　大阪天満宮御文庫連歌叢書」の項は、『大阪天満宮連歌書目録』をそのまま収録したものであるが、『大阪天満宮連歌書目録』を作成した際の誤りがそのまま残されていることなど問題点が多く、利用に際しては注意を要することを指摘されました。

また、御文庫に収納されている連歌書を、①西山家伝来書②滋岡庫旧蔵連歌写本③滋岡長松（長昌）筆連歌写本古本④岡延宗献上本⑤その他　に分類され、それぞれの特徴について話されました。

その中でもとくに、①西山家伝来書と西山家について詳細に説明されました。西山家は、正保４（1647）年９月、西山宗因が大阪天満宮の連歌所の宗匠に迎えられて以来、代々宗匠を務めてきた家であります。

西山家の連歌書の天満宮への伝来過程については、寛政～文化・文政期の大阪天満宮神主であった滋岡長昌の日記（『滋岡家日記』）に、また書名については、滋岡長昌自筆『連歌書籍目録』に書かれており、『連歌書籍目録』と西山家伝来書を比較してみるとほぼ現存しているとのことです。

西山家伝来書には、宗因自筆の『宗因発句帳』をはじめとする西山家代々宗匠自筆の発句帳が残されており、そのことによる大阪天満宮御文庫の独自性と宗因研究の進展について示唆されました。

ほかにも、御文庫の歴史や全体像、目録の作成当時のエピソードや、滋岡長昌が大坂の文人と交際していたことなど、御文庫をめぐる興味深いお話がちりばめられ、大阪天満宮御文庫に長年かかわってこられた島津先生ならではのお話を聞くことができました。

（文責：RA松本　望）

なにわ・大阪文化遺産学研究センター今後の予定

2006年
1月14日（土）第2回NOCHSレクチャーシリーズ
「なにわ野菜VS京野菜」
報告：森下　正博氏
（大阪府立食とみどりの
総合技術センター都市園芸グループ長）
久保　功氏
（野菜文化史研究センター所長）
1月21日（土）　第2回祭礼遺産研究例会
1月28日（土）　第2回生活文化遺産研究例会
第2回学芸遺産研究例会
３月９日（木）関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター竣工式

切り抜き帳

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、各新聞社によりいろいろな記事で紹介されています。

吹田くわい、天王寺かぶら…

なにわ野菜

京野菜に挑戦するで

関大、復活へ研究を開始

来歴や特性 調査し活用

縦じまとコブが特徴の勝間なんきん、円筒形の田辺大根など個性あふれる「なにわ野菜」（大阪府立食とみどりの総合技術センター提供）

吹田くわい、天王寺かぶら、玉造黒門しろうり。大阪各地に伝わる伝統野菜「なにわ野菜」を復活させようと、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター（大阪府吹田市）が研究に乗り出した。不明な点が多い来歴や特性などを調査して活用につなげる計画で「京野菜に挑戦したい」と意気込んでいる。

正式には「なにわの伝統野菜」といわれ、近世から明治末期までに大阪で栽培された品種で、田辺大根や毛馬きゅうりなど二十種類以上あるとされている。長く大阪の食文化を支えてきたが、多くは都市開発や病虫害の影響、食生活の変化などで表舞台から姿を消した。

近年になって各生産地で保存・活用を目指す動きも出ているが、実態が分からない部分もあり、また京野菜のように体系化されていないという。

研究は、高橋隆博教授（六）らのグループが取り組む歴史的な「文化遺産」プロジェクトの一環。例えば、吹田市近郊で生産された吹田くわいは江戸時代、宮中への献上品として毎年京都に届けられていたことが、木札などで判明している。高橋教授らはさらに、社寺の古文書や絵図などからお供えや祭礼の行事食に使われた歴史を調べたり、流通経路などを探る。実際に栽培にも挑戦する。

高橋教授は「なにわ野菜の生産地は大阪各地に点在していて、他地域の野菜はほとんど知られていない。つながりをつくり、大阪共有の文化遺産として伝え、その上で活用策を考えたい」と話す。

吹田くわいを栽培する高橋教授

（京都新聞提供）平成17年9月21日（水）
京都新聞夕刊10面

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

センター長
高橋隆博（関西大学博物館長、関西大学文学部教授）

総括プロジェクトリーダー
藪田　貫（関西大学文学部教授）

[プロジェクト]
祭礼遺産研究プロジェクト
生活文化遺産研究プロジェクト
学芸遺産プロジェクト
歴史資料遺産プロジェクト

[研究者・研究協力者]

明尾圭造（芦屋市立美術博物館・学芸員）
有坂道子（京都橘大学助教授）
市川秀之（大阪狭山市教育委員会・学芸員）
近江晴子（大阪天満宮文化研究所）
大谷　渡（関西大学文学部教授）
小野功龍（天王寺楽所雅亮会・会長）
北川博子（阪急学園池田文庫研究員）
北川　央（大阪城天守閣学芸員）
黒田一充（関西大学文学部助教授）
小谷利明（(財)八尾市文化財調査研究会事業室係長）
酒井亮介（(社)大阪中央卸売市場本場市場協会資料室・室長）
髙橋隆博（関西大学文学部教授）
鶴崎裕雄（帝塚山学院大学・名誉教授）
妻木宣嗣（大阪工業大学・講師）
西本昌弘（関西大学文学部教授）
長谷洋一（関西大学文学部助教授）
浜野　潔（関西大学経済学部教授）
原田正俊（関西大学文学部助教授）
藤井裕之（吹田市立博物館・学芸員）
藤田真一（関西大学文学部教授）
前田成雄（清文堂出版（株）会長、大阪書林御文庫講副講元）
南谷恵敬（四天王寺執事、四天王寺国際仏教大学教授）
南坊城充興（道明寺天満宮・宮司）
森　隆男（関西大学文学部教授）
藪田　貫（関西大学文学部教授）
山本　卓（関西大学文学部教授）
吉井克信（大阪歴史学会会員）
吉田晶子（枚方市文化財研究調査会学芸職員）
米田文孝（関西大学文学部教授）

[ポストドクトラルフェロー（P.D.）、リサーチアシスタント（R.A.）]

森本幾子（P.D.）
内田吉哉（R.A.・祭礼遺産研究プロジェクト）
内海寧子（R.A.・祭礼遺産研究プロジェクト）
宮元正博（R.A.・生活文化遺産研究プロジェクト）
千葉太朗（R.A.・生活文化遺産研究プロジェクト）
松本　望（R.A.・学芸遺産研究プロジェクト）
櫻木　潤（R.A.・歴史資料遺産研究プロジェクト）

編集後記

『難波潟No.2』をお送りいたします。なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、その後も、大阪やその周辺地域への調査、研究例会やNOCHSレクチャーシリーズ、出開帳、文化遺産学フォーラムなど、多彩な行事を行っていますが、本誌でその一端を知っていただければ幸いです。スタッフ一同、毎日大変忙しくしておりますが、地域社会へ研究成果を還元するという目的を忘れずに取り組んでまいります。今後とも、よろしくお願い申し上げます。　（PD　森本　幾子）

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターNews Letter「難波潟（なにわがた）　No.2」
発行日　2005年12月1日
発行所　関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
発行者　髙橋隆博
〒564－8680　大阪府吹田市山手町3－3－35　関西大学博物館内
TEL　06（6368）0095　FAX　06（6388）9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm
E-mail:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp
編集協力　㈱廣済堂